

ドイツ語学習における指導方法の工夫と効果

著者	菊地 達夫
雑誌名	北翔大学短期大学部研究紀要
巻	56
ページ	37-46
発行年	2018-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002662/

ドイツ語学習における指導方法の工夫と効果

A Device and Effect of the Instruction Method in the German Learning

菊 地 達 夫*
Tatsuo KIKUCHI

I は じ め に

自明のことではあるが、1991年大学設置基準の改正以降、一般教育科目や外国語科目などの縛りが柔軟となり、大学独自で設定できるようになった。その結果、専門科目が重視され、一般教育科目や外国語科目などを縮小するといった動きがみられた。外国語科目の場合、英語は、比較的、維持・強化は続いたものの、それ以外の外国語は必修を外されやすくなった。具体的には、語学クラス数の減少、基礎科目や発展科目の統合、科目そのものの自体の廃止といった形で生じた。

英語以外の外国語となる第2外国語は、ヨーロッパ系言語とアジア系言語が主流である。ヨーロッパ系言語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語など、アジア系言語は、韓国語、中国語などが挙げられる。従来、第2外国語の中心は、ヨーロッパ系言語であったが、アジア系言語の台頭により、その位置付けが変わりつつある。その要因は、韓国のドラマ・映画を中心とした韓流ブームや訪日アジア系外国人観光客の増加にある。そのため、ドイツ語などのヨーロッパ系言語の位置付けは、ますます厳しい状況になりつつある。

本学の場合、ドイツ語（2017年度）は、半期科目の設定となっている。近年における指導方法の課題は、興味関心を高めながらの学習意欲の維持、基礎的な文法事項の知識理解の定着である。この課題解決に向けた指導方法の思考錯誤が続いている。

ドイツ語学習における指導方法に関する先行研究には、山田・津田（2016）、田中（2007）などがある。山田・津田（2016）では、外国語学習において初年次段階で支援することが課題ととらえ、その解決に学習工夫のシートとフォーラムといった開発を行い、それを検証した。その結果、初年次段階の学習支援が、有効であったことを示した。また、学習活動のつまずきとして、アルファベットの英語との類似性や発音がローマ字読みといった取り組みやすさがある一方で、動詞の人称変化などに入ると難しく感じてしまう学習者が多い点を指摘している。

田中（2007）では、学習内容の傾向として、文法学習中心からコミュニケーション学習中心へ移行していることを挙げている。学生のモチベーションは、文法学習中心では難しく、また受講者数が多くなるに従い、低下していくことも指摘している。しかしながら、ドイツ語学習

* 北翔大学短期大学部こども学科

のあるべき姿として、文法学習を中心とした知的かつ実践的な展開によって、言語運用能力獲得を目標とするような方向性が重要であると指摘する。とりわけ、文法学習は、その拡張の可能性を大きく持つ点を強調している。

これまで筆者も、ドイツ語学習における指導方法として、知的な文法・文化的な学習と実践的なコミュニケーション学習を組み入れながら、知識理解・能力の向上を目指す工夫を重ねてきた。そこで、本稿は、直近（2017年度）の指導方法の工夫を示し、どのような学習効果を得たのか、明らかにしようとするものである。具体的には、ドイツ語学習の終末において、学習内容に関するアンケート調査を行い、指導方法の改善が、どの程度、達成できたのか、判断する。指導方法の工夫の仮説として、①復習プリントや確認テストを組み合わせた授業内外の反復学習を行うことで、知識理解の向上につながるのではないかと、②ドイツ事情に関する読み物資料を取り入れ、学習記録を書かせることで読解力を促し、その結果、内容に対する興味関心の向上につながるのではないかと考えた。

研究資料は、2017年度前期「ドイツ語」（再履修者を含む）の受講者より得たものである。

Ⅱ ドイツ語学習の実態・課題

1 ドイツ語学習の変化

ドイツ語を含む語学学習は、文法、読解（リーディング）、会話、ライティングの他に、文化を含めると多岐にわたる。すでに述べたように、第2外国語の学習機会・時間は、相対的に縮小傾向にある。加え、大学の規模や学部学科のカリキュラム編成によって、状況はさらに厳しくなる。そのため、半期科目1コマのみという場合も多い。最低時間数の場合、週あたり90分授業1回となり、授業内容の工夫をより必要とする。

また、学習内容にも大きな変化が生じている。これまでの文法学習からコミュニケーション学習へ移行しつつある。すなわち、使えるドイツ語といった実践的な内容が好まれるようになってきた。こうした流れは、ドイツ語はもちろん外国語全般の傾向としてみられる。

初級文法の場合、市販教科書の構成は、13課～15課程度が多い。学習速度は、1課90分授業を想定しているものの、全15回（週1回）の授業で終えることは難しい。週あたり1コマの授業であれば、授業時間の間隔が開き、前回の復習に一定の時間確保を必要とする。それゆえ、教科書全体の半分程度しかすすむことしかできない。受講者からみれば、教科書の内容を半分程度で終えるのであれば、購入の負担感も大きくなる。最近では、教科書を用いない授業のあり方もみられるようになった。

以上から、現在のドイツ語学習は、限られた時間の中、興味関心を高めつつ、学習内容を精選し、いかに効果的に展開できるか、求められている。よって、授業の工夫・改善は、より重要性を増している。

2 本学におけるドイツ語学習の設置形態の変化

本学のドイツ語学習の設置形態は、2000年以降、大きく3つの期に分けられる。第1期では、基礎科目と発展科目を配置し、通年科目の位置付けにあった。履修者数（基礎科目）は、1コマあたり40人前後であった。語学学習としては、やや多く、それ以上の希望者数となった場合、2コマに分けた。また、発展科目は、基礎科目を含むドイツ語の既修者を対象としたものである。実際には、履修者の学習理解の差異は大きく、未修学者を含むようなこともあった。

第2期では、カリキュラム全体のスリム化を目指した結果、第2外国語を半期科目とした。基礎的な初級文法を中心とするものの、内容の精選を必要とした。年度により履修者数の増減が大きく、授業展開に課題を残した。

第3期では、第2期での課題を受け、学年による履修者数の区分を行った。具体的には、2年生のみ¹⁾と3年生以上の2コマの設置である。3年生以上は、再履修者を想定したものであるが、実際には新規履修者が大半であった。

全体を通じた課題として、履修者の3～4割程度は、途中脱落するような状況が続いている。その原因は、学習意欲によるもの、欠席などを起因とする学習理解の困難性によるものが挙げられる。とりわけ、名詞の格支配や形容詞といった複雑な文法学習の時間を欠席してしまうと、その傾向は高まった。

その他では、学習内容の重点の難しさがある。文法学習は、重点となるものの、無味乾燥な内容の連続には限界がある。ドイツ語またはドイツ自体に興味関心を持ってもらうには、楽しい学習活動の場面を必要とする。具体的には、コミュニケーション学習または文化的な内容の部分導入である。ただ、時間配分において、文法学習とその他との調整に難しさが増した。

Ⅲ ドイツ語学習における授業改善の内容

すでに述べたように、大きな授業改善として、1つは、文法学習を動詞と名詞に絞り、その反復学習を授業時間内で徹底するようにしたこと、もう1つは、授業の終末に、ドイツ事情に関する読み物資料（日本語）を導入したことである。

授業の全体構造は、3つに分かれる。まず、導入学習では、基本的なドイツ語のしくみ、英語との関係性、ドイツ語を母国語とする地域の確認を行った。続いて、アルファベット、基本挨拶、数詞（1～12・13・20）、曜日・月といった順で取り上げる。とりわけ、アルファベット、基本挨拶、数詞、曜日・月の学習では、発音練習を中心としながら、文字や単語を確認しながらすすめた。

基本文法学習は、動詞で4回、名詞で4回とした。動詞は、人称の確認、現在人称変化、現在人称強変化（不規則 sein/haben）、現在人称弱変化（不規則 a→¨型, e→i型, e→ie型）、命令形を取り上げた。名詞は、性・数・格の関係、定冠詞、不定冠詞、複数形、冠詞類（定冠詞類・不定冠詞類）を取り上げた。授業展開は、最初に前回の確認テストを実施、その後、文法学習の説明、作業学習を行い、最後に、復習プリントの実施と読み物資料の活用を行っ

た。

確認テストは、実施後、すぐに自己採点を行い、誤答に対して正答を書かせるよう指示した。復習プリントは、文法事項を2回以上、書かせるというものである。この復習プリントが、次の確認テストの内容となる。そのため、必然的に自宅学習につながるよう意識した。読み物資料は、一読させた上で、補足解説を行い、最後に「わかったこと」を書かせるよう指示した。この「わかったこと」を書くという行為によって、資料の読解、解説の理解に集中力を与えるようにした。

その他の工夫として、取り上げる動詞や名詞を、学部に関係するようなものを目指した。具体的には、教育文化学部やライフデザイン学科の場合、教育・芸術に関する内容を、生涯スポーツ学部の場合、スポーツ・運動・施設に関する内容を取り上げるようにした。

確認学習は、動詞と名詞に関するまとめ（振り返り）の機会をそれぞれもち、既習事項を書くという作業を通して知識理解の定着につながるようにした。それを経て、最終試験を実施した。最終試験には、読み物資料に関する内容からも出題している。翌週、最終試験を返却した上で、講評（解答解説）を行い、誤答に対しては正答を書くよう指示した。その後、事後アンケート調査を行い、継続的に自己学習する方法に触れ、全15回の授業を終えた。

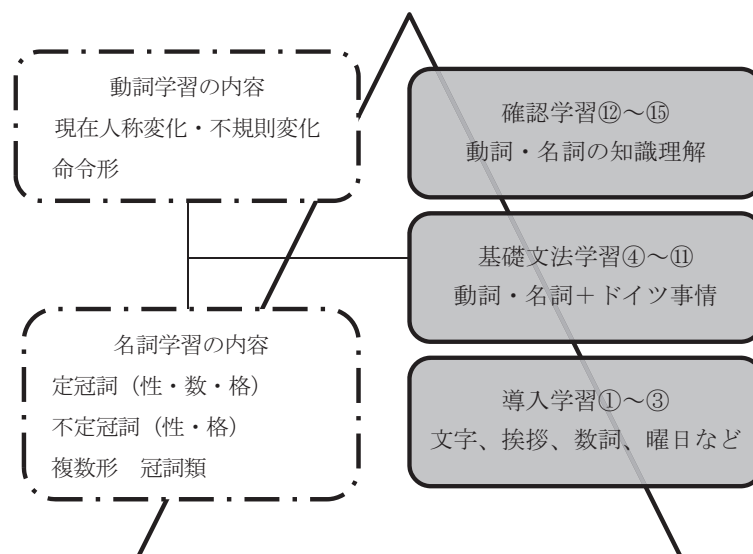


図1 ドイツ語学習の全体構造（2017年度）

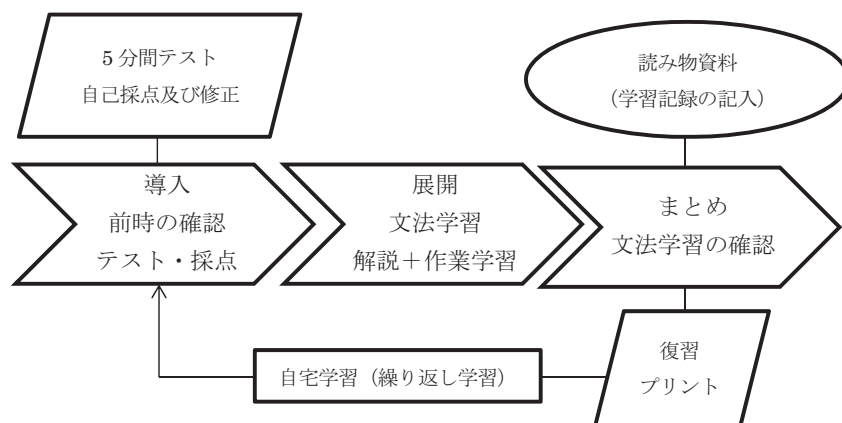


図2 ドイツ語学習の授業構造（基本文法学習／2017年度）

ドイツ事情／読み物資料の事例 【ドイツのクリスマス】

ドイツのクリスマス期間は、4週間あります。12月25日と26日が祝日であり、その前の約4週間を待降節と言います。

待降節第1主日に続く1週間が第2アトヴェント。こうして第4アトヴェントに入りますと、いよいよクリスマス本番です。

町の中央広場にはクリスマスの市や露店の屋台が建ち並んで1年中で最も賑わいます。各家庭では、24日ツリーを飾りつけ、1月6日まで出しておくのが普通です。

この時期には、美しいアトヴェンツクランツが見られます。モミの木の葉と枝を組み合わせで作られた丸い環には赤いロウソクが4本立てられ、赤いリボンがその環を飾ります。第1アトヴェントの初日に1本のロウソクに火が灯され、第2アトヴェントには2本のロウソク、第3アトヴェントには3本、そして4本のロウソクすべて火が灯りますと、クリスマスイヴはもうすぐにそこまできています。アトヴェントカレンダーも華を添えてくれます。12月1日から24日までの日付が書かれた24枚の扉がついたカレンダーを取り出します。この時期に人々はドイツのクリスマス・ケーキであるシュトレンを食べます。11月末ごろに作られ、表面に塗ったバターと粉砂糖が生地に染みてくる2週間後ごろが食べどきです。24日のクリスマスイヴと25日のクリスマス第1日を、ドイツの人々は家族で静かに過ごし、商店なども翌26日までほとんど閉まっています。

また、ヨーロッパでは、12月6日が聖ニコラウス祭にあたります。サンタクロースのモデルにもなっている聖ニコラスは、紀元300年頃現在のトルコで布教に努めた聖人であり、5日の深夜から6日の未明にかけて靴下の中にプレゼントを入れてくれます。しかし悪い子には、鬼の形相をして鞆を持っているお供のルーブレヒトから罰が与えられます。

クリスマスカードやプレゼントを贈るときは、待降節に入ったらすぐ送りましょう。

資料）秋田静男他（2012）：『ドイツ語インフォメーション neu²』朝日出版社、44頁。

表1 関係学部学科に関係する動詞・名詞の例

動詞	名詞
【教育的・芸術的な内容】 教育文化学部・ライフデザイン学科 lernen 学ぶ singen 歌う lesen 読む	【教育的・芸術的な内容】 教育文化学部・ライフデザイン学科 男/Klang 音 女/Frage 問題 中/Klavier ピアノ
【スポーツ・運動・施設的な内容】 生涯スポーツ学部 laufen 走る schwimmen 泳ぐ werfen 投げる	【スポーツ・運動・施設的な内容】 生涯スポーツ学部 男/Muskel 筋肉 女/Nahrung 栄養 中/Knie ひざ

Ⅳ ドイツ語学習における授業改善の効果

本章では、事後アンケート調査の結果を手がかりとして、授業改善について、どのような学習効果を認められるか、判断していきたい。

項目1（4段階評価）では、授業の全体構造（第1～3段階）における内容・展開方法について尋ねた。その結果、高評価（4・3）の割合は、95%を示した。理由をみれば、継続的な反復学習による知識理解、段階による学習内容の積み上げや関係性のつながりの明確化に役立ったものと判断できる。

項目2（4段階評価）では、基本文法学習の授業方法・展開について尋ねた。その結果、高評価（4・3）の割合は、85%を示した。理由をみれば、学習内容の再確認や学習速度の妥当性に役立ったものと判断できる。結果、文法学習の知識理解に一定の役割を果たしたものと考えられる。

項目3（4段階評価）では、ドイツ事情に関する読み物資料の導入について尋ねた。その結果、高評価（4・3）の割合は、90%を示した。理由をみれば、ドイツに関する多様な理解や興味関心の広がりにも役立ったものと判断できる。

続いて、どのような内容に興味関心を強くもったのか尋ねた。取り上げた内容は、ドイツの大学、2014年サッカーワールドカップ、バーデン・バーデン（温泉）、アイスカフェーとは、ドイツの街と旅行事情、ドイツの料理、ドイツのクリスマス、ドイツの映画事情の8つであった。その結果、ドイツのクリスマスが最も高い支持を得て、バーデン・バーデン（温泉）と2014年サッカーワールドカップが続いた。ドイツのクリスマスを選択した理由として、休暇期間の長さやケーキづくりをはじめとした日本との違い、ミュンヘンクリスマス市開催の親近性などが挙げられた。

加え、全体を振り返っての感想では、文法事項における覚え方について、有益だったという指摘があった。文法事項の規則は、無味乾燥なことが多く、初学者にとって覚えにくい。動詞の場合、現在人称変化の語尾変化に関するもの、名詞の場合、不定冠詞に関するもので覚え方を示した。動詞では、単数1人称、2人称、3人称、複数1人称の語尾変化をごろ合わせした（エ ス ト テン=e・st/t・en）というものである²⁾。名詞では、不定冠詞の無変化（ein）の部分、平仮名（つ）の一部分の位置に見立てたものである。

以上から、授業改善の効果は、概ね仮説のとおり立証できたものと考えられる。他方、課題として、確認テストの実施方法にやや課題があったこと、文法学習が限定的内容に留まったこと、コミュニケーション学習の機会が十分でなかったことなどが挙げられた。確認テストの課題の場合、実施時間（標準5分間）がやや短かったこと、自己採点による正答の曖昧さが指摘された。また、反復学習を重視した結果、その他の学習内容に時間を割くことができなくなってしまった。

表2 動詞の現在人称変化（不定詞：trinken 飲む）

人称（単数）	語尾変化		人称（複数）	語尾変化	
ich 私は （1人称）	trinke	e	wir 私たちは （1人称）	trinken	en
du 君は （2人称／親称）	trinkst	st	ihr 君たちは （2人称）	trinkt	t
er 彼は （3人称）	trinkt	t	sie 彼らは （3人称）	trinken	en
Sie あなた（たち）は（2人称／敬称 単数・複数） trinken					

表3 不定冠詞＋動詞の例

格	男性名詞 Traum 夢	女性名詞 Reise 旅行	中性名詞 Haus 家
1格	ein Traum	eine Reise	ein Haus
2格	eines Traumes	einer Reise	eines Hauses
3格	einem Traum	einer Reise	einem Haus
4格	einen Traum	eine Reise	ein Haus

事後アンケート項目の基本的内容

1（項目1）ドイツ語の学習展開（全体）について

第1段階（3回目まで）では、アルファベート、挨拶、数詞、曜日等の学習、第2段階（11回目まで）では、動詞、名詞の文法学習、第3段階（15回目まで）では、動詞・名詞のまとめ（最終試験を含む）で進めてきました。この段階学習について、理由を添えて評価して下さい。

←良い 悪い→

【 4 3 2 1 】

●理由

2（項目2）ドイツ語の学習展開（1コマ）について

1コマでは、前時の確認テスト、本日の文法学習、ドイツの事情、本日のまとめという流れで進めてきました。この学習の流れについて、理由を添えて評価して下さい。

←良い 悪い→

【 4 3 2 1 】

●理由

3（項目3）ドイツ語の学習では、文法学習以外に、「ドイツの事情」の読み物資料の読み取りを導入しました。その学習の方法・内容について、理由を添えて評価して下さい。

←良い 悪い→

【 4 3 2 1 】

●理由

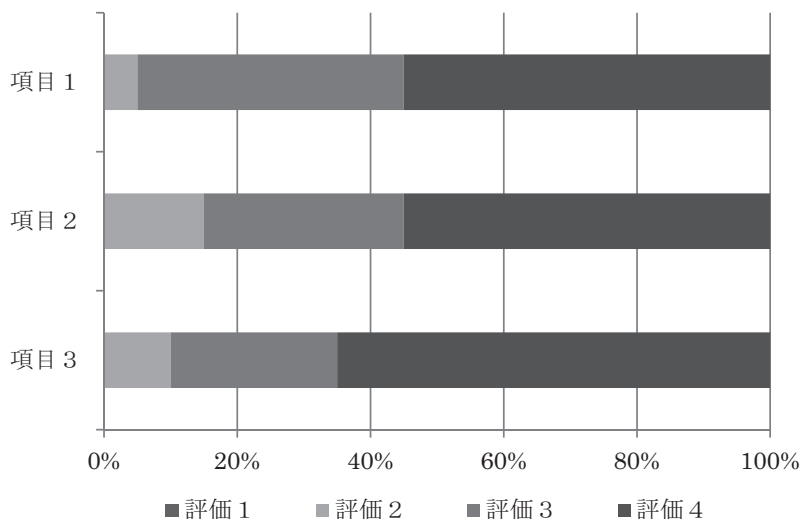


図3 デイツ語学習における事後アンケート結果（2017年度）
資料）アンケート結果。

表4 各項目における高評価の理由（例）

項目 1	【 評価 4 = 高評価の理由 】
<ul style="list-style-type: none"> ・毎時間前回の復習をしながら進めてくれたので、習ったことを理解できていないまま授業が進んでいくということがなかった。 ・段階が分けられていたことで頭に入ってきて勉強しやすかった。 ・段階ごとに学習することで、その段階の内容に集中しやすく、前回までの学習内容と関連付けやすいから。 	
項目 2	【 評価 4 = 高評価の理由 】
<ul style="list-style-type: none"> ・最初に前回学んだことを再確認できるので良いと思った。 ・ゆっくりじっくり進めてくれたので初めてのことを勉強しやすいスピードだった。 	
項目 3	【 評価 4 = 高評価の理由 】
<ul style="list-style-type: none"> ・普段知らないドイツの事情を知ることで、ドイツについてさらに興味を持つことができた。 ・文法だけではなく、読み物としてドイツ事情について知ることができた上に、手元に残る形になっていたのが嬉しかったです。 ・様々なテーマでドイツの事が分かり、面白かった。 	

資料）アンケート結果。

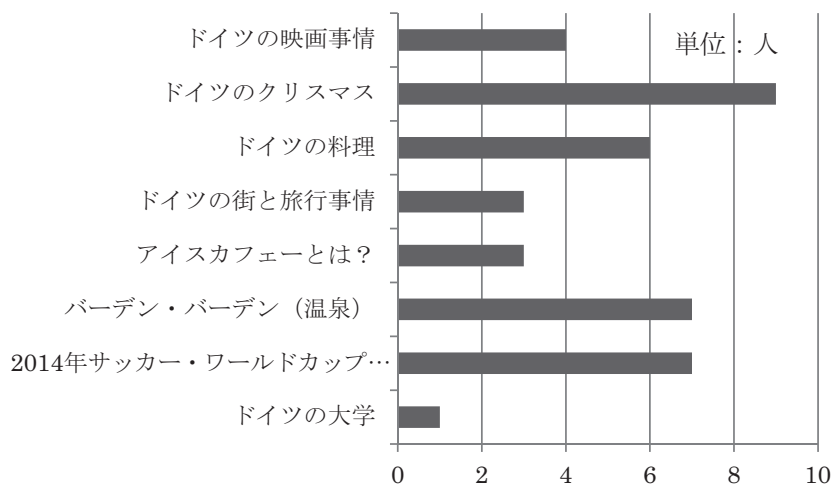


図4 印象に残ったドイツ事情（読み物資料）
資料）アンケート結果（複数回答）。

表5 【ドイツのクリスマス】の選定理由（例）

- ・大通公園でミュンヘンクリスマス市をやっているから割と馴染み深いと思った。
- ・ドイツのクリスマスが長いということに驚いたからです。
- ・日本と違うところがあり、たくさんあり、驚いて一番印象に残った。
- ・クリスマスが12月初頭から、ケーキを作る話が印象深い。

資料）アンケート結果。

Ⅴ お わ り に

以上、本稿は、ドイツ語学習の指導方法の工夫を行い、どのような学習効果を得ることができたのか、明らかにしようとするものであった。そのため、2つの仮説を立てた。具体的には、反復学習による文法事項の知識理解の向上、読み物資料導入によるドイツに対する興味関心の向上であった。

すでに述べたように、事後アンケート調査の結果をみれば、反復学習による文法事項の知識理解の定着、読み物資料導入によるドイツに対する興味関心の広がりには寄与できたものと判断できる。よって、指導方法の工夫は、受講者の学習理解・意欲を高めることに有効であった。

他方、文法事項の知識理解では、確認テストで一定の評価を得ながら、最終試験の結果に結びついていない。今回も、履修者の半数程度、再試験を受けた。文法事項の学習内容が増えるに従い、過去の学習内容が希薄になっているものと考えられる。自宅学習のあり方が、直近の確認テストの学習に限られ、全体を見据えて復習するような仕組みになっていない。

加え、自宅学習の方法に課題がみられた。例えば、新しい動詞や名詞を出題すると、全く解答できないことがあった。この原因は、学習方法が丸暗記となり、文法構造を理解していなかったものと推測できる。すなわち、知識の定着を重視した反復学習の方法が、影響を与えた。この手の学習方法は、単位修得のための最低限の学習として役立つものの、ドイツ語のもつ面白さを認識することは難しい。改めて、文法学習のあり方の難しさを痛感した。

これらの課題は、引き続き思考錯誤しながら、より適切な学習方法を開発し、克服していきたい。

注

- 1) 「ドイツ語」の授業は、短期大学部こども学科のみ、カリキュラム・時間割の都合上、履修できない。
- 2) 現在人称変化の語尾変化のごろ合わせによる覚え方は、ドイツ語の参考書などに掲載されていることが多い。なお、このごろ合わせは、2人称（親称）に2人称（敬称）を直後に加えての表掲載の場合、順番が異なり使用できない。

文献

- 田中一嘉（2007）：知的ドイツ語学習のススメ大学教養教育におけるドイツ語教育の現状と今後－文法学習の再構築を目指して－，群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編第56巻，pp.161-176.
- 山田容子・津田純子（2016）：初修外国語教育における自己調整学習の可能性－初年次向けドイツ語学習での実践的試み－，新潟大学高等教育研究第4巻，pp.29-36.